

宝塚市の品格論

—「変貌する周辺都市」の一節—

大 道 安 次 郎

—

いずれの都市にも、それぞれ独自の「個性」がある。それは「市格」や「格位」のように一定の規準で数量化できない。私はそれを「品格」としてとらえたい。

ここで「市格」というのは、地方自治法(第8条第1項)で定められた一定の規準を充たせば、町村とは違った「市の資格」を認められた普通地方公共団体のことである。その規準というのは、たとえば、人口5万以上であるとか、中心の市街化を形成している戸数が全戸数の6割以上であるとか、商工業その他の都市的業態に従事する者が全人口の6割以上であるとかいうような規準を充たせば、法人格が附与され、「市としての資格」が認められたものである。私はこれを「市格」としてとらえたのである。だから「市格」はあくまで行政的立場からとらえられたものであること、しかもそれは一定の数量的基準によってとらえられたものであることに、注意しておきたい。つぎの「格位」というのは、都市の人口規模に大小がある点に着目したとらえ方である。鈴木栄太郎博士が都市に結節機関が多ければそれだけ多くの人口が集ることに着目して、都市間の序列を説いた。都市の人口規模を基準として、人口の多い都市はそれだけ格式が高く、少なければそれだけ低い。博士はそれを「格位」と名づけた¹⁾。ここで注意しておきたいことは、こうした序列は人口規模による数量的規準によってとらえられていることである。ところが都市の「個性」は、「市格」や「格位」と違って独自のものであるから、数量化できない質的なものである。いわばそれは「市格」

や「格位」とは次元を異にしたものである。その「個性」を私は「品格」として表現したのである。ここで「品格」という表現をとったのは、さきの「市格」と「格位」と同じ「格」という表現で統一したまでであって、とくに他意あつてのことではない。

ところで都市の「品格」は個性的なものであるから、その都市だけが持っている独自のものである。その市全体にただよう雰囲気だとか、街並みに見られる風情だとか、人情味だとか、自然の景観だとか、その都市ならではの独得なものである。それは質的なものであるから、「市格」や「格位」のように数量化して序列づけはできないとしても、何らの基準で識別が行われている。独自のものであるから、数量的基準での序列づけを放棄したままであつて、一切の序列づけ、あるいは格づけを放棄したわけではない。「山高きを以て貴しとせず」といわれているように、ただ数量的な高さのみでの貴賤を放棄しただけである。山の貴賤の判別の場合に、山の表面が豊かな森林に掩われているとか、地下に金銀宝石が埋れているとか、石炭や石油などのエネルギー資源が埋蔵されているとか、さては山全体の景観が優れているとかいうように、各種各様の観点からの貴賤を判別することもできる。都市の「品格」についてもこれと同じことがいえる。私はこのような観点に立つて、宝塚市の品格を考察することが、ここでのテーマである。

そしてこのテーマの考察をつぎのような順序で行いたい。

まず宝塚市の品格形成の要因を宝塚市が住宅都市であり、同時に観光都市である点に求めた。そ

1) 鈴木栄太郎著「都市社会学原理」(昭和40年、有斐閣刊)211,428頁。

れは都市的機能が品格の主な要因であると思われるからである。そしてこれらの都市的機能は歴史的条件、立地条件、自然的条件、社会的経済的条件などさまざまな条件の複合的作用によって、宝塚市の現在の住宅都市と観光都市が誕生したことを明らかにすることを目指した。

つぎは宝塚市の品格の実像を確めることである。そのためにヴィジブルな側面とインヴィジブルな側面からの二つのアプローチを用意した。

つづいて宝塚市の品格は現在のところ未成熟な点が多いこと、またそれが何に起因するかについて触れ、未来型の品格形式の途を探ること。

さいごに都市の品格の価値判断について考えたい。

二

まず宝塚市の品格形成の要因を探ることからはじめよう。

人間の人格形成にはさまざまな要因が相乗しており、しかもそこに「個性」が見られるのは、何らかの要因がとくにその人間に作用しているからであろう。同じことが都市の品格形成についてもいえる。都市の品格形成にもさまざまな要因が相乗作用しているが、とくに強く作用しているのは都市的機能ではなからうか。

いずれの都市でも数多くの都市的機能を営んでいるが、それらの多くの機能をほぼ均等に営んでいる都市と特定の機能を突出した形で営んでいる都市とがある。巨大都市や地方拠点都市などは前者に属しており、工業都市、商業都市、学園都市、観光都市、住宅都市、宗教都市などは後者に属している。これらの都市的機能の営みが、それぞれの都市によって異なっているところに、それぞれの都市の「品格」が見られ、独自性が見られるのであろう。だから都市的機能は都市の「品格」形成の第一義的要因といえよう。だがそれぞれの都市がそのような機能を営んでいるのは、それらの都市の自然的条件、歴史的条件、立地条件、社会的条件、経済的条件などさまざまな条件がそれぞれ異っているからである。だからこれらの諸条件は、

さきの都市的機能を第一義的要因とすれば、その根底にあつて、第一義的要因の基盤となっているものだから、前者を直接的要因とすれば、後者の諸条件は間接的要因といえよう。

このことを宝塚市についていえば、つぎのようにいえる。

宝塚市の都市的機能はほかの多くの中小都市のそれと異つて、とくに住宅的機能と観光的功能(レクリエーションも含む。以下これを観光的功能と略す)の二つの機能が同時に突出していることにまず注目しておく必要がある。

宝塚市の住宅都市的機能は戦後とくに顕現化しているが、その素地はすでに戦前からあつた。さきに触れた基盤的要因(間接的要因)が存在していたからである。自然的条件(温和な気候、山紫水明な自然環境、少ない自然災害など)や立地条件(職場のある大阪市や神戸市への交通の便があること)など住宅都市的機能を営むための諸条件に恵まれていたからである。これらの条件が戦後の経済高度成長期を迎えて一挙に顕現化した。このことは宝塚市が市となった昭和29年当時の人口が4万ぐらいであつたのが、現在20万近くになっていること(いわば人口急増都市であつたこと)、しかもその増加は自然増よりも社会増によってであつたことからもうかがえる。この社会増の殆んどは、職場のある大都市から住宅を求めて来住した人びとである²⁾。かくして宝塚市は名実ともに住宅都市となつたのである。このことは国勢調査(以下国調と略す)結果からもうかがえる。住宅都市の特色のひとつは、夜間人口が昼間人口よりも多いことである。45年度の国調では、夜間人口183,552、昼間人口139,759、それは流入人口16,662と流出人口60,455の差から生ずる結果である。流出人口の多くは職場のある大都市やその周辺部に通勤する人びとである。これらの数字は宝塚市が住宅都市であることを如実に示している。

つぎは観光的功能であること。宝塚市の観光資源は極めて多彩である。古くから温泉地と知られており、宝塚歌劇、宝塚ファミリーランド、それにゴルフ場(戦前は市域に1であつたのが、戦後のゴルフ・ブームもあつて現在11もある)、国営

2) 詳細なことについては、拙稿「宝塚市の最近10年間の人口推移をめぐって」(「関西学院大学社会学部紀要」第46号、1983年3月所載)を参照されたい。

阪神競馬場、さらに清荒神や中山寺など古くから多くの信者を持っている神社仏閣など多彩な観光資源に恵まれている。この観光資源の多彩であることは、それだけほかの多くの観光都市のように冬期のスキーだけとか、夏期の海水浴だとかいうようなワンポイントの観光資源での季節的な観光客の流入人口とは異って、年間を通じて流入人口が多い³⁾。それに加えて、最近の週休二日制の定着化、余暇時間の増加、また健康への関心度の高まりなどによって、観光客の増加は当然である。これらの観光客の数は恐らく一日平均35,000人ぐらいに達するであろう。それにさきの国調の流入人口16,662人を加えると、昼間人口は夜間人口と同数か、あるいはそれを上回ることになる。このことは宝塚市が観光都市であることを如実に現わしている。国調の数字は、この点を調査の外にしていたから、その点に関する限り訂正すべきであろう。

それはさておき、宝塚市が住宅都市であり、同時に観光都市であることは明らかになった。だが両者が同じウエートを持っているとはいえない。とくに最近住宅都市的機能がますます強まっている。このことは第1回の「宝塚市建設計画基本構想」（昭和40年）では、両者が併置されていたのが、それ以後の「基本構想」では、住宅都市的機能を前面に打ち出していることからでもうかがえる。

さてつぎの問題は、このような都市的機能を持った宝塚市の「品格」を探ぐることにある。そこにはほかの都市には見られない独自の「品格」がある筈である。「品格」は量化できないから、明確な形としてはとらえられないにしても、実体は存在している筈である。そこで私はそのために二つの角度を用意した。その一つは、「品格」をヴィジブルな側面、いわば物的なものを通してとらえる角度であり、その二は、インヴィジブルな側面、いわば人的なものを通してとらえる角度である。「品格」の実体は、この二つの側面を表裏の関係として持っていると考えられるので、この二つの角度を用意したわけである。

まずビジブルな側面から。

人間の人がらや人格は、その人間の服装を通してある程度はうかがえる。しかもその服装は制服や礼服ではなく普段着であって、たとえ高価なものではなくとも、その着こなしや清楚さなどを通して、おのずとその人がらうかがえる。都市の普段着に相当しているのは自然的景観や道路、街並み、建物の形や色彩、そのほか一連の都市施設などである。それぞれの都市は、その都市の起源や規模や財政力に応じて、それなりの普段着を着用しており、また着こなしをしている。そしてそこにその都市の品格が自づと現われている。では宝塚市の場合はどうであろうか。

私はかつて宝塚市を外側からとらえて、「^{へそ}臍のないまち」であり、また「顔のよごれたまち」であると、評したことがある⁴⁾。それは昭和40年のことである。だがあれから20年近い年月を経た現在でも、臍は依然として存在していないし、よごれた顔もいくらかは綺麗になったとしても、まだまだよごれが各所に見られる。

まず「臍がない町」と評したことについて。これは当時の宝塚市に都心というべきものがなかったし、また住民がつねに集る広場（いわゆる「市民広場」）もなかった。ではなぜ臍がなかったのか。

さきにも触れたように、宝塚市は昭和29年に当時の町村合併促進法に便乗して、市制を敷いた。合併の核となったのは、旧宝塚町と旧良元村であったが、いずれも田舎町であった。幸に戦災を蒙らなかったのが、そのために逆に思い切った戦災復興計画が実施されないまま市となった。道路は狭いうえに、曲りくねっていた。都心もなければ、都市的施設も不十分であった。ところで合併した核はさらにいくつかの旧字から構成されていたが、これらの旧字（旧部落）にはそれぞれ小規模の集会場所があった。それらの部落集会場所にはその前庭や鎮守の森やお寺の庭があった。鎮守の森やお寺の高い屋根、また朝夕ひびくお寺の鐘の音もその地区の人びとのシンボルであった。だがこれらの旧部落が合併して旧宝塚町や旧良元村となった段階では、すでに限られた地区の住民たち

3) これらの数字は国調のように正確ではない。予測の範囲を出ない。なおこのことについては、上掲の拙稿参照されたい。

4) 「宝塚市建設計画構想」5頁、昭和40年。私はこの建設審議会の会長をつとめたが、その総論の一節での表現。

の集る広場でしかなかった。そしてそれらがさらに合併して市制が敷かれた。しかも当時は阪急電鉄の各停留所附近に小規模の商店街があっただけである。さらに合併後は住宅都市的傾向の高まりとともに新住民がなだれこんだために、それぞれの地元の空気も一変した。

そのうえ武庫川をはさんで合併前の中核となっていた町村が、新しい施設をつくるたびに、あちらにこんな施設をつくったからこんどはこちらにというように、市全体のことを考えるよりもむしろ自分たちの地区のエゴを中心としていたので、現在見られる蛸の足のような施設のバラ蒔き状態となったのである。またシンボルともいえる市庁舎にしても当時の政治的事情もあって旧良元村の村役場であったのが、最近新しく武庫川畔の西側に新市庁舎が新築された。新市庁舎は規模の点でも建築様式や色調の点でも、立派なものであるから、本来なればひとつの臍となる筈である。だが現在では実質的には臍となっていない。何故であろうか。旧市庁舎に広場がなかったが、同じように新庁舎にもない。それに何よりも交通の便が悪い。これまで都市施設が不充分であったので、その充実をはかろうとする意欲は多とするが、市街地に用地を求ようとすれば莫大な費用が必要である。それに兩岸の旧勢力のことも念頭におかねばならない。それに何よりも市全体の施設の総合計画が明確な形で確立されないままに、個々の施設の建設のみに明け暮れていたからであろう。さきに新市庁舎の足の不便について触れたが、本来なれば広い道路を造設すると同時に新市庁舎の完成を計るべきであった筈である。それと同じことが市民会館の建設の位置にも見られる。自動車を利用しなければ行けない場所にある。切角の市民会館も利用者は限られている。仏作って魂入れずということであろう。新市庁舎が現在実質的に臍となっていないのもここらあたりに原因がある。

いずれにしても宝塚市はいまだに「臍のないまち」だといえよう。

では「顔のよごれたまち」の現状はどうであろうか。

ここで「顔」というているのは、宝塚市の表玄関のことを指している。宝塚市の表玄関といえば、国鉄宝塚駅と私鉄阪急宝塚駅附近のことである。

そこは国鉄と私鉄の連結点であって、朝夕の通勤者のラッシュ時はもちろんのこと、宝塚歌劇の観客、ファミリーランドの観光客をはじめ多くの人びとで終日にぎわっていたし、現在でもその利用者は年々増加しており、まさに住宅都市、観光都市の表玄関としての「顔」に適わしいといえよう。私が40年当時この「顔」が田舎町のように混雑してよごれていたのを敢えて、「顔のよごれたまち」と評したのである。

もちろん市当局や国鉄や私鉄阪急の関係者や地元の人たちもその顔のよごれに気がついてきたから、そのよごれをきれいにする必要を痛感していたが、なにぶんにも三者と地元との協力が必要であるので、その地区の再開発計画の実施には容易に踏みきれなかった。だが国鉄福知山線の複線化の実現、阪急今津線南口駅の附近の再開発事業の完成もあって、最近漸く実施計画の第一歩を踏み出そうとしているが、現状では依然としてその顔はよごれたままである。

ところで宝塚の「顔」は表玄関のほかに、阪急の各停留所附近などにも副次的な多くの「顔」がある。その「顔」のうち、今津線の宝塚南口附近と宝塚線の清荒神駅附近の「顔」はきれいになった。宝塚南口駅附近の再開発事業は、かなり以前に大阪万博開催を機会に完成し、「サンピオーラ」(ピオーラは市の花スミレを意味し、光りかがやくスミレという意味であろう)と名づけた近代的商店街として装いを新たにし、駅前の宝塚ホテルとともに美しい「顔」となった。南口からファミリーランドへ通ずる武庫川の新大橋も再建され、美を誇っている。また宝塚線の清荒神駅附近も市立図書館、ベガ・ホール(音楽堂、天体の星のひとつの名前)が併設されている淡い茶褐色のモダンな建物と清荒神の鉄斎記念館とが相俟ってすっかり美しい「顔」となった。だがそのほかの各停留所附近はいまだに「顔」はよごれたままである。ただ阪急今津線の逆瀬川駅前地区市街地再開発事業の完成は秒よみの段階に入り、その第一歩としてのプレショップ(旧市庁舎跡に建設されたイトーピア第1号館)開設がこの4月1日オープンした。この逆瀬川駅前地区再開発事業は本来なれば南口駅前再開発事業以前に実現される筈であった。最初の計画では、これらの地区の開発はいずれも阪

急電鉄の今津線の各停留所附近が中心であったので、終点宝塚駅、南口駅、逆瀬川駅という順で開発すべきであったのが、電鉄路線の高架化の技術的都合を考察して、まず逆瀬川駅附近の高架化から始めるのは妥当であるとして、その第1号として逆瀬川駅前地区再開発が計画され、すでに県、国などの了解も取りつけていたのが、地元の反対運動のため実現されなかったのである。だが今回の同地区開発事業は、さきに見送られた開発計画や南口地区の開発が市の責任で行われたのとは異って、全く民間の組合施行の形で行われ、再開発地区も広く（その規模の大きさでは恐らく全国でもAクラスに属するであろう）、さまざまな斬新な企画も織こまれていることは注目に値する。ところでこの地区の再開発はいずれは行われる情況にあった。というのは、逆瀬川駅附近近くにあった市庁舎の移転が地元商店街に大きなマイナスとなったこと、逆瀬川上流での数多の高級マンション建設に伴う顧客を見逃してはならないこと、それに南口再開発によって見本を示されたことなどもあって、もし現状のままでは旧い商店街として衰微の道を辿ることは火を見るよりも明らかであったからである。といって、市の主導型の開発はさきの失敗のこともあって期待できないので、地元の民間の組合施行で行うしか方法がなかった。そこで地元では数年前から慎重に案を練って、漸くその実現への第一歩が踏み出されたのである。恐らく「美しい顔」が逆瀬川地区に遠からず見られるであろう。

いずれにしても宝塚市の「顔」は南口地区を除いては、表玄関にしても、逆瀬川地区にしても、「美しい顔」になるのは将来のことであるし、ほかの副次的な顔にいたっては停留所の増改築はあっても、地区としては再開発の動きすら見られない。だから市全体としてはいたるところの顔はまだ薄化粧の程度に過ぎない。それに何よりも気になるのは道路整備がおくれていることである。さきに中国縦貫高速道路開設の際、側道計画が考慮されたが、これも地元の反対で陽の目を見なかった。それが市内の交通事情の悪化の一因ともなっている。さきの第一次の逆瀬川地区開発計画も地元の反対で見送られたこととあわせて考えて、地元の近視眼的な反対には反省すべき点があったといえ

よう。とにかく道路整備のおくれは、住民の足の不便ばかりではなく、宝塚の「顔のよごれ」をいつまでも美しくさせない厚い壁となっていることだけは、ここで改めて指摘しておきたい。

ところで宝塚市は観光都市でもある。だから観光面でもそれなりの「顔」がある。ただ宝塚の場合はほかの観光都市とは違って、多くの観光資源に恵まれている。だからそれだけ多くの「顔」があるわけである。たとえば、火の神、水商売の神として信仰されている清荒神、出産の仏として知られている中山寺なども「顔」であるし、宝塚歌劇を中心として、動物園、植物園、遊園地などの施設をもったファミリーランドとその道筋の通称「花の道」界限も「顔」であるし、武庫川をはさんでの温泉旅館街も別の「顔」であるし、国営競馬場やゴルフ場(市内に11もある)もそれぞれ「顔」である。さらに武田尾温泉や武庫川渓谷も然りである。これらは年齢層に応じてそれぞれの魅力的な「顔」となっている。だがそれらはそれぞれ「個」としては「美しい顔」であるが、矢張り問題は道路にある。とくに競馬の開催日、清荒神や中山寺の礼祭日の交通混雑は言語に絶するものがあり、その整理のために警官の手を煩わしているほどである。

ところでこうした「個々の顔」が寄りあつまって「都市美」が形成されている。だから宝塚市には宝塚らしい「都市美」がある筈であり、また考えられる筈である。そこでまずその「都市美」の現状について見てみる必要がある。

幸に宝塚市は山紫水明と謳われているほど自然環境に恵まれている。市の中央を流れている武庫川の清流も、上流に戦事中建設された軍事工場と戦後の高度経済成長期の乱開発のために、河鹿の美しい声も絶えたとし、名物の鮎も死滅したし、また螢も見られなくなったが、現在はむかしの清流に漸次帰りつつある。それに兩岸の川床も整備され、さまざまな施設も計画されているので、再びもとの武庫川の面影が復活するのはそう遠くないと思われる。また武庫川上流の渓谷美のすばらしいものに目をつけた一部の有志の間から、その保存と開発の運動が起っていることも注目してよい。

このように宝塚市は自然環境には極めて恵まれ

ている。それだけに住宅の乱開発、土砂の乱採取、松食虫の被害などによって、これ以上の山肌のよごれを防止して、美しい緑の山を守ることが必要であろう。

なおここで宝塚市の「空気」の美味なことにについても触れておこう。戦後のしばらくは尼崎市あたりは工場乱開発のため市内を流れる神崎川は「死の川」となっていたし、市内も工場からの煙や悪臭によって、空気はよごれていた。大阪から阪急電車で宝塚に帰えるとき、武庫川を渡ると次第に空気が美味になり、西宮北口で乗換えて宝塚市に近づくにつれて文字通り美味になったことを想い出している。それは宝塚市には煙や悪臭を出す工場がなかったことと緑の自然環境に恵まれていたからであった。なお尼崎市あたりも現在は公害発生源の工場も規制されたこともあって、現在では見違えるほど空気のよごれも無くなっている。「死の川」の神崎川の水も魚が住むようになった。人間の意志と努力の結果である。尼崎市の名誉のために一言こたわっておく。

ところでその都市独自の「都市美」は、市内のそれぞれの地域の独自の建築様式やその色彩が全市的に調和しているところに見られる。宝塚市でも、住宅地域、商業地域、工業地域など新都市計画法に基づいた地域指定が行われている。そしてそれぞれの地域ではそれなりの独自の建築様式が見られるが、色彩の点では規制外であって全く自由放任の形である。私は建築様式や高さのほかに、建物の色彩もまた都市美の見地からは見逃すことができない重要な要素であると考えている。

現在の段階では、全市的に見てそれぞれの地域での色彩での不協和音は格別見られない。いかにも宝塚らしい色彩の調和を保っている。それぞれの「顔」はそれなりの独自な色彩で統一されており、その地域の基調的役割を果たしている。たとえば、ファミリーランドの歌劇場など一連の建物の色彩、南口のサンビオラの色彩、清荒神のベガ・ホールの色彩、さらに市庁舎の色彩などに見られる。願わしいことは現在開発計画進行中の逆瀬川地区の建造物の色彩、こんごさらに続々開発されるであろう武庫川畔の高層マンションの色彩については周囲との色彩の調和を考慮に入れて欲しいものである。これらの建造物の色彩は、公的建造

物ならいざ知らず、民間デベロッパーの自由裁量に任されており、彼らの独自性を発揮する領域に属してはいるものの、周囲の色彩と調和を保って、全市的な品格のある都市美の形成に協力を惜まないことを願っている。もちろん都市美の見地からいえば、それぞれの地域や「顔」には独自な色彩があることが望ましいのであって、それを同じ色彩で全市を塗りつぶすことには賛成できない。もし全市を灰色で統一された場合を想定すれば、墓場を連想させるであろう。あるいは度を越した強い赤色で統一すれば、それこそ狂気の人びとの住むまちであろう。だから多様や色彩がうまく調和しているところに、都市美の一面がうかがわれるのである。

それにしても市内の病院の夜間のド強い赤色のネオンの表示には気にかかる。幸に宝塚市には大都市に見られるような目立ったラブ・ホテルや高級バーがないので、そこで見られる原色の赤や青のネオンは目に映じないだけに、病人の医療機関である病院にこのようなネオンが見られることは何としても気にかかる。自己顕示もほどほどにして欲しいものである。

つぎに都市美で見逃すことができないのは、「音」の問題である。公害源になっている騒音、とくに自動車の騒音についてはここでは視野の外におく。ここで「音」というのは「音楽のまち」に適わしい「音」を市全体に漂わせることにある。もちろん「音」の全然ないまちは想像できない。工場地域、商業地域、住宅地域などにもそれなりの「音」がある。たまたま昼さがりに温泉街を歩くと、どこからともなく三味線の音色とともに小唄の歌声が聞えたり、高級住宅地を歩くと、どこからともなくピアノのメロディーが流れてくる。それらは雑音でない限り、耳にする人たちをなごませるであろう。だが私がここでとくに全市的立場から美しいメロディーの流れる「音」のことを考えている。たとえば、朝夕流れてくるお寺の鐘の音、聖心女学院のチャペルから流れてくるチャイムの音色、さては清荒神のベガ・ホールのカリヨンからの美しいメロディーなどは、「音楽のまち」宝塚市に適わしいものといえよう。こうした見地から、宝塚市庁舎や近く完成される逆瀬川市街化区域の建造物にも、このような「音」

の施設が実現されることが望ましい。いずれにしても「音」もまた都市美の形成の一翼であるから、宝塚市に適わしい「音のまち」にして欲しいものである。

さてつぎはインヴィジブルな側面からうかがえる「品格」について。さきに普段着を着用している人がらについて触れたが、インヴィジブルな側面は主としてその人がらにかかわっている。とすると、まず問わねばならないのは、宝塚市の住民の「質」についてである。私がここで「質」というのは、社会的地位とか収入とかでの区別でなく、彼らの近隣社会、地域社会、あるいは都市社会や市の行政での「かかわり」において見られる人がらのことである。たとえば、近所つきあいがいとか、町内会や地域社会の問題でもそれなりの関心を示しているとか、また市の行政についても税金はもちろん収めているし、また市長や市会議員の投票を怠っていない忠実な「市民」であるかなどによる「住民の質」のことである。それぞれの「かかわり」がうまくいっておれば、そこから滲み出る都市の「品格」が自づと見られる。たとえば、近隣での「かかわり」がよければ、なごやかな空気が近隣に溢れるであろうし、相互扶助も自ら生ずるであろう。自分の家の街筋などの清掃や軒先きに花を飾ったりする雰囲気も住民たちの人がらの然らしめるところであろう。ほかの局面での「かかわり」についても同じことがいえる。さらにほかの都市からの見知らぬ来訪者に対しても、心温まる「かかわり」を持つかどうか、宝塚市の住民の人がらを示すであろう。

そこで宝塚市の住民の「質」についていまだ少し立入って考察してみる必要がある。現在の宝塚市の人口は19万を越している。市となった29年当時の4万の人口に比べれば、来住者の数がいかに多いかがうかがわれる。彼らの殆んどは宝塚市に職を求めての来住者ではなく、主として大阪都市圏内の職場に通勤するための住宅を求めての来住者であることをまず指摘しておきたい。彼らの関心は専ら職場のある都市にあって、住宅のある宝塚市にはない。最近行われた市長選の投票率は34.4%の最低であったが、これにはほかの多くの

原因も考えられるが、彼らの市政への無関心が投票率の低下のひとつの原因となっていたことも事実であろう。それに彼らの多くは、単に市政に無関心であるばかりではなく、近所つきあいにしても、地元社会との「かかわり」にしても、表面的なものが多い。彼らは朝早くほかの都市の職場に出勤し、夜は寝るだけの住宅に帰るのであるから、時間的余裕がないといえ、確かにそうであろう。一方同じ家族でも妻や子供たちの「つながり」は夫と異っている。子供たちは学校や友人関係でそれなりの地元社会との「つながり」はあるし、妻たちはP・T・Aその他の関係、さらに日常の食料などの入手のこともあって、地元への関心は夫たちよりも濃い。だから「つながり」の点からいえば、家族内の関心は三分されているといえよう。

ところで彼らの宝塚市への関心度を間接的に示す二つの資料が手もとにある。その一つは、55年度の国勢調査に見られる住民全体を対象にした世帯主の入居時期と住民所有形態をまとめたものである。入居時期は出生時からが13.1%、昭和39年以前からが10.8%、40年～44年が10%、45年～50年9月が31.1%、54年10月以降が12.5%となっている。また持ち家は62.5%（全体の数字は33,868、50年9月以前21,136、50年10月以降12,722）を占めている。公営・公団・公社の借家が3,942、民営借家11,538、給与住宅4,377である⁵⁾。

入居期間がかなり長いことと持ち家が62.5%であることは、住民の定着性の高いことを示している。ただ民営借家や給与住宅がかなり多いことが気になる。というのは、これらの住宅に住む人たちのなかには宝塚市を「仮の宿」として考えている人びとが多いし、また勤め先の都合でいつ転勤するかわからないからである。

もう一つの資料は、「阪神間都市圏の広域行政」（これは阪神広域行政都市協議会が広域行政の基礎資料のために行った調査をまとめたもの。46年7月刊）のなかで、定着性にかかわりのある「今後とも現在のところに住みつづける考えがあるか」を問うた項目の集計結果から、宝塚市のそれを抜き出したものである⁶⁾。

5) 統計季報宝塚 No.43. 81' 5,9頁。

6) 拙著「周辺都市の研究」119頁。

それによると、「住みつづけたい」が55.4%、「わからない」が27.7%、「移りたい」が14.7%、N.K. 2%となっている。50%以上の人びとが住みつづけたいということから見て、さきの持ち家の62.5%と併せて考えると、住民の定着度が住宅都市としてはかなり高いといえよう。

だが安心してならない点も多くある。さきに見たように「仮の宿」と考えている人びとも多いことのほかに、住宅都市の人びとの多くは都市化された人びとであり、自分たちのことには関心を持つが、他人のことはもちろんのこと、公共のことがらについても消極的な関心しか示していない人びとが多いからである。だから彼らの多くは宝塚市の「品格」の形成に積極的な関心を持たないし、またあまり協力しないのも当然であろう。

現在も宝塚市に臍がないのも、また多くの顔が依然として美しくなっていないのも、ここあたりに原因があるのではなかろうか。というのは、市の「品格」の形成を積極的に考え、それを推進している人びとはごく限られた人びとであって、大多数の人びとは無関心であるからである。大多数の人びとは住宅を宝塚市に求めてきた人びとであって、旧市民の4倍近くも占めている。ところが歴代の市長はもちろん、市会議員の多くも旧市民である。こうしたひと握りの人たちによって、市政が運用され、施設計画も行われている。これでは旧態依然といわれても仕方がないであろう。

以上がヴィジブルとインヴィジブルの二つの側面からとらえた宝塚市の「品格」の現状であり、またそれをそうさせている主な原因である。

三

だが現状をそのまま是認することとは別に、宝塚市に適わしい「品格」の形成について考えることも必要であろう。

さきにも触れたように、宝塚市が発足してからすでに30年近くの年月を経ている。発足当時は田舎まちの寄合い世帯であり、都市的施設も不充分であったから、「臍のないまち」であり、また「顔のよごれたまち」であったことも当然であろう。その間にあって住宅都市として人口が急増した。そのために毎年教育費の支出が全予算の30%代を

占め、財政的にもほかの都市施設に回す余裕がなかった。そのうえ発足当時の二つの核が武庫川をはさんで対峙して、あちらにこんな施設をしたから、こんどはこちらにというように、施設の配置にしても地元エゴに支配されて全市的配慮が欠けていたところから、現在見られるような章魚の足のような結果になっている。顔のよごれているのも、また臍のないことも当然だったといえよう。

だが30年の才月の経過によって、最近はかなり明るい見通しの材料もいくらか出揃ってきた。というのは、人口急増のテンボも落つき、教育費も市の財政支出の20%代に漸減し、財政面でいくらか明るい見通しが見えてきたし、発足当時の二つの核の勢力も対峙から協調へと漸次解消しているからである。だからこれからがまちづくりに本格に取り組み、宝塚市に適わしい「品格」の形成に取りかかる時期だといえよう。

ただ宝塚市の場合にはつぎのことがらは与件として認めなければならない。

その1。市の年期は極めて若い。しかも城下町のように過去の伝統がない。これから新しい伝統を創り出さねばならない。その意味では宝塚市の「品格」は、過去型の「品格」ではなく、未来型の「品格」でなければならない。

その2。宝塚市はこんごも住宅都市的傾向を強めるであろう。住宅都市の住民の多くは地元の宝塚市には無関心である。だからこのことを念頭に入れての新型のまちづくりを考え出す必要があろう。

その3。宝塚市はまた観光都市的傾向を依然として持続するであろう。住宅都市としての宝塚市の住民は市政に対して無関心ではあるが、それでも歴とした市民権を持っている。だが観光客は宝塚市の住民ではなく、市民権を持っていない。だから市としては彼らに直接的な行政責任がなく、観光資源の持主や経営者が施設その他に責任を持つと同時に観光者より収益を得ている。間接的には市財政を潤しているが、殆んどは国や県に吸いあげられている。だから市の財政面からいえばあまりプラスにはなっていない。とはいっても観光事業関係者の数は全住民の%から見ればそう多くはないが、彼らもまた宝塚市の住民であり、市民権を持っている。そればかりではない。観光都市

であることは、宝塚市の「顔」の形成や風情、雰囲気の助成に対して無形の寄与をしていることを見逃してはならない。

ただ市全体の立場から見ると、住宅都市的機能と観光都市的機能とはかなり二律背反的な矛盾している面がある。その矛盾をどう調和さすかがこんごの課題であろう。というのは、この矛盾を調和させることは、宝塚市ならではの独自の「品格」形成にひとつの新しい道を開くであろうからである。

その4。それにしても宝塚市の「品格」形成に最も必要なことは「臍」をつくることと「顔」を美しくすること、さらにそのための基礎条件としての道路の整備である。顔を美しくすることは漸次実施の段階にあるが、臍をつくることは現実的には不可能に近い。というのは、市街化区域に新たな臍をつくることは現実的には容易に望めないからである。現に新市庁舎附近を「臍」とするのには、道路の整備はここ当分望めそうもないし、また新市庁舎附近は既存の個人の店舗やマンションなどですでに一杯である。広場や一連の公的機関や金融機関などの設置の余地などは全然ない。いわば新市庁舎は異質な地域に孤立した格好である。だからそこを「臍」とすることは望むべくもない。といって、それに代る「臍」の形成も無理である。

このように見てくると、宝塚市の場合には「唯一の臍」の形成を考えることよりも、むしろ「複数の臍」の形成を考えることの方が、より現実的に即した「臍づくり」といえないであろうか。それはそれぞれの顔を手がかりとしての「複数の臍づくり」である。そしてそれらの臍を道路の整備によって、有機的に結びつけることがより賢明であろう。ここで「複数の臍」というのは、それぞれの機能に応じての臍のことである。

だから道路の整備が「品格」形成の基本的条件であるが、総論賛成各論反対であるから、それも容易なことではない。とはいっても道路の整備こそ早急に万難を排して実施すべきであろう。

その5。宝塚市の品格形成にとって無視できないのは、宝塚市全体が「色」と「音」の調和を保っていることである。色調についていえば、公共施設については、市当局が責任を持てるが、民間の

施設については彼らの協力を仰ぐ必要がある。またそれぞれの地区にも独自のものがある。それぞれの地区の「顔」をキー・カラーとしてそれなりの特色を出すとともに、全市的な色調を出すことが必要であろう。市の行政指導にも限界があるので、民間からの積極的な協力を得られるような市全体の雰囲気の醸成が必強であろう。

また宝塚市が「音楽のまち」として適わしい音が静かに流れるようにすることも、宝塚市の独自の「品格」形成にとって必要条件といえよう。

いずれにしても宝塚市のような伝統のない都市は未来型の品格形成を志向しなければならない。ある意味からいえば過去にとらわれないから、それだけ期待もされよう。だが一方に恵まれた多くの条件はあるとしても、他方では内部に多くの矛盾もかかえている。一方では恵まれた条件を積極的に生かし、他方では矛盾を克服して、宝塚市ならではの独自の品格を創り出すことが望まれる。とはいっても市当局の基本的姿勢と行政指導の発揮とともに、市民として、また住民としての積極的な協力がなければ、その創出は不可能であろう。ここで想起するのは、かつて「公害のまち」といわれた尼崎市がここ10年ほどの間に見違えるばかり「きれいなまち」になったことである。その背後には尼崎市当局の異常なまでの努力と住民たちの協力があつたことを見逃してはならない。宝塚市の品格形成にとって他山の石とすべきであろう。

宝塚市の品格は独自の未来型の形成を目指すべきであるが、その際これまでほかの都市での「臍づくり」や「顔づくり」から学ぶべきことが多い。たとえば、国鉄関西本線の奈良駅の建築様式や色調はいかにも古都奈良を生かしているが、東海道本線の京都駅はその点を全く考慮に入っていない。古都京都の味を生かそうとする意図よりも、むしろ機能性に重心をおいていたために、どこにでも見られる建築様式と色調になっている。また九州の日肥本線の豊後竹田駅では列車の発着ごとに郷里の生んだ瀧廉太郎作曲の「荒城の月」のメロディを流しており、日豊本線では歌人若山牧水の出身県である宮崎駅をはじめ県下の多く駅に彼の短歌の歌が見られる。飛行場にしても宮崎空港

では南国調の花で飾られているし、鹿児島空港でも同じである。以上のことがらはそれぞれの都市の個性をそれなりに積極的に生かしていることの実例である。宝塚市の場合についても同じことがいえよう。未来型に適わしい独自の新しい「顔づくり」の工夫を忘れないで欲しい。

四

さいごに都市の「品格」の評価について一言触れておきたい。

都市の「品格」というような独自の個性についての評価が極めて困難なことは、その基準の求め方や評価する人びとの立場によって評価結果が対立した形で現われることがしばしば見られるからでもうかがえる。そのひとつの例を、私の経験したことがらを手がかりとして述べてみよう。

私は20年ほど以前に大阪市周辺や阪神間のいくつかの都市の総合開発基本計画審議会に委員として参加したことがある。その際私はそれらの都市の「福祉地図」⁷⁾を作成した。「福祉地図」というのは、社会病理現象をいくつかの項目に分類して、客観的基準によって、全市的に、また地区ごとに調査して、それらの調査結果を集計したものを地図化したものである。これによってその都市の福祉度が客観的に判別されるであろうし、またとくに悪い「問題地区」が発見されるであろう。この「福祉地図」の作成によって、総合開発計画樹立に際して福祉行政の立場から、全市的にはどの点にとくに手を打つべきか、また「問題地区」に対してはどの点に早急な対策が必要であるかなどについての基礎資料を提供することができる。私の「福祉地図」作成の意図はこの点にあった。

その際、私は客観的基準による福祉度の調査のほかに、主観的基準による福祉度の調査も同時に行った。後者のそれは、地区の住民たちが自分たちの地区を主観的にどうとらえているか、端的に言えば、「住みよいまち」、「好ましいまち」と思っているかどうか問うことであった。本来なれば、客観的基準と主観的基準との調査結果が一致する

筈であるのに、地区によっては逆な調査結果が見られた。客観的基準によって劣っていると思われた地区(とくに「問題地区」)の多くの住民たちは、自分たちの地区こそは住みよいところであり、また好ましい地区であると思っているという意外な結果が出たからである。乙に澄ました高級住宅地区よりも、何ごとにも裸でつき合うことができ、また服装や言葉なども喧しくいわない地区、いわば袴を着用せずに本音で生きられる地区こそは、ある意味からいえば、住み心地のよい地区ともいえよう。だからこうした地区の多くの住民の主観的基準からいえば、彼らの地区こそはまさに「より好ましい地区」となるわけである。この客観的基準による調査結果と主観的基準による調査結果の隔離を前にして私は愕然とした。そこには彼らの本音、市当局や学者たちの表面だけの机の上だけのきれいごとの建前本位の計画に対して、いらぬお世話はごめんだという強い拒否反応がその底に見られたからである。ではこの両者の隔離をどう埋めたらよいか。

主観的判断は各人の自由であるからといって、そのまま放任すればよいであろうか。もちろんそれが全く個人的領域に属する限り、その自由は尊重すべきであろうが、仮りにその地区の道路や衛生事情がとくに悪く、悪臭がまちにたちこめ、またギャングや暴力団の巣であれば、それらの悪影響は何らかの形で全市域に拡がる恐れがある。とすると、社会的公共的立場から何らかの手を打つことが必要になろう。とはいっても地区住民の感情や意見を無視するわけにもいかない。彼らの積極的な賛成と協力を得なければ、たとえその地区が「よい地区」になったとしても、それは「形」だけのもので、内実は依然として「問題地区」とどまる恐れが多分にあるからである。総論賛成、各論反対、あるいはその逆に総論反対各論賛成といったことではなく、両論とも賛成といった形にしたら落つかすことができるかの工夫が必要であろう。そのためのひとつの工夫として、しばしば住民参加の方式が採用されている。この方式の採用の本来の狙いは、彼らの「本音」を引出して、

7) 当時、私のこの「福祉地図」の作成は、一部にかなり関心をよんだようである。私と前後に岡村重夫博士(当時大阪社会事業短期大学長)も大阪市を対象に同じような調査をしている。ただ博士のそれは対象が巨大大都市であったから、キメの荒かったのは当然である。私のそれは対象が中都市であったので、それだけキメが細かった。

その生の声を「建前」に反映させ、生かすためである。そればかりではない。彼らの無関心さや拒絶反応の態度を少しでもやわらげ、できれば彼らの積極的な協力を導き出すためである。だが多くの場合、ごく一部のエリート・クラスの住民のみの参加にとどまっている。だから住民参加や公聴会が単に形式的に終るケースが多いといわれているのは、このためであろう。言うは易いが、実行

にはさまざまな困難な事情があるところに、現実問題処理の難かしさがあるわけである。以上が私の経験した実例からの反省であった。

ところで、このことは宝塚市の新しい「品格」形成についてもいえる。この新しい「品格」の形成は、誰のためのものであるか、その形成の主体は誰なのかなどについて、この実例から多くの学すべきことがらが汲みとれる⁸⁾。

8) 本稿はことしの4月初旬に兵庫教育大学で開催された第1回日本都市社会学会での報告を加筆訂正したものである。なおこの問題については過去にも異った角度から再三触れている。本稿は専ら宝塚市に焦点を絞った。